

### 新春メッセージ

創立四十周年に寄せて

郷土史研究者

荒木恵吾

こぶし座のみなさま  
明けましておめでとうござ  
います。

新年は、こぶし座創立四十  
周年を迎えるこのころ、永い  
歲月、みなさまが励んだ民族  
芸能への強い情熱と、歌舞へ  
の漲る精進に唯々心から敬意  
を表します。

とくに木直大正神楽につい  
ては、若い保存会の人たちが  
こぶし座への指導と援助を通  
じ、かえって刺激を受けて新  
たな決意で活動に励んでいる  
様子に、地元の方々はこぶし  
座のおかげと感謝しておりま  
す。

年頭に当たり改めて厚く御  
礼申し上げます。  
去秋、北海道開拓記念館主  
催の「北海道の民俗芸能」舞  
う・囃す・競つ特別展に、町  
内から木直・大船の神楽と安  
浦の駒踊りの古い大道員・小  
道具なども出品・陳列されて  
道民の大きな関心を呼びまし  
ました。

記念館の方々が事前調査に來  
訪、私も旧保存会の方と立ち  
会いました。  
古い諸道具の中に、大正一  
年（一九一三）創始期に南部  
の甲地（かつち）村（現東北  
町）高宮（たかみや）稲荷か  
ら譲り受けた「山の神」の面  
（おもて）が、箱書きと共に  
出現して感激の場面がありま  
した。  
昭和53年（一九七八）創  
始65周年の祝いの折、生き  
のこりの創始者・渡辺竹次郎  
（明治27年生）の思い出話  
のとおり実在していました。  
この山の神の面と箱書き  
は、去秋の記念館の特別展の  
数多い展示の中でも異彩を放  
ち、木直大正神楽の歴史と伝  
統の誇りを実感しました。  
思えば昭和50年の夏、こ  
ぶし座のみなさんが家族ぐる  
みで見日（けんいち）に合宿  
にいられ、青年たちと交流し、  
早朝みなさんで昆布干しをし  
てくださったました。  
去る12月1日、南茅部町  
は、函館市と合併になり、尾  
札部町・木直町と表記されま  
した。  
小生も77歳になりました

が、曾祖父が裏山に作庭して  
のこした「三百坪に二百株の山  
つつじを守っています。恵山  
のつつじ祭りと同じ頃に満開  
となります。是非一度こ来遊  
ください。」

（南茅部町文化財保護  
審議会会長 ほか  
尾札部町在住）

豊頃町文化協会

事務局長

岩井 明

今年三月十日をもって創立  
40周年の記念すべき節目を迎  
えるにあたり、心よりお祝い  
申し上げます。

昨年十一月十七日、豊頃町  
「える夢館」において十数年  
前に続き二度目の公演が行わ  
れ、舞踊・和太鼓・神楽・歌  
舞劇などの洗練された演技と  
舞台の円滑な流れの中で、会  
場一杯の観客と出演者が一  
体となり、大きな笑いと盛大  
な拍手が送られ大盛況の中で  
終了しました。

実行委員の一人としてこの  
公演の取組に参加したこと  
今後の文化活動への大きな励  
みと成りえた事を申し添えて  
おきます。

取組については、こぶし座  
と文化協会（高木皓会長）の  
趣旨に共通する点が数多くあ

り、協会を中心に取組もつ  
との考えから協会三役が核と  
なり、実行委員を編成して協  
会加盟団体の協力を得、さら  
に豊頃町文化講演（公演）支  
援事業制度の最初の助成を受  
けるなど理想的な形で開催  
となり、公演成功へと導かれ  
ていきました。

さらに、開幕直前までの手  
綱をゆるめず完璧を目指す座  
の姿勢（総体的練習）が観客  
に通じ、感動と魅了を与えた  
ことで公演成功につながりま  
した。  
真実として、数多く寄せら  
れたアンケートが語っていま  
す。

十数年ぶりに会う懐かしい  
顔が力の限り演じ、観客の声  
援を受けながら閉幕した後、  
初めて安堵の表情を浮かべた  
心情が伝わってくるのを覚え  
ています。

公演が終わった交流会の席  
上で、観客から寄せられたア  
ンケートに目を通し「喜一憂  
するこぶし座の皆様。  
観客と実行委員に夢と希望  
・感動を与えてくれたこぶし  
座の皆様へ最大の賛辞を送る  
と共に、創立50周年を目指  
し、さらに飛躍することを願  
っています。

息子・娘たちへ

森越清彦

お父さんが生まれた年、そ  
う昭和二十一年の十一月、お  
父さんの誕生から四十日後に  
日本国憲法は生まれた。

中米の「コスタリカ憲法」  
に先立つ、20世紀以降の世界  
の歴史に燦然と輝く9条を持  
つ日本国憲法は、日本の戦後  
史を性格付けた。9条の精神  
は、お父さんの心にしつかり  
根づいたただでなく、9条が  
あればこそ、戦後日本の子ど  
も達が武器を持ち、他国民を  
直接殺害するという戦争行為  
をせざるに來た。

今君達が大人になろうとす  
るこの時期に、憲法9条を改  
定し、日本を再び「戦争ので  
きる国」にしようという強い  
政治の動きが現実のものにな  
るつとして。お父さんの  
心と生きてきた時代を踏み  
じるように。

函館には「こぶし座」とい  
うプロの歌舞団がある。君達  
も何度が「こぶし座会館」に  
は足を運んだね。太鼓を打つ  
人も、踊る人も、歌う人も、  
そしてこれを作り運営する國  
田さんというおじさんも、お  
父さんは尊敬してやまない人  
たちです。  
地域や民族の持つ文化や芸

術は本来平和の礎です。

これを大切にし、更に新た  
な挑戦をしながら、日々努力  
を続けているこぶし座の人た  
ちをお父さんは無条件で「凄  
い人たちだ」と思っている。

丁度、戦後・被爆50周年  
の年に、お父さんの思いと同  
じ心で、國田さんは市民手作  
りの平和行動「平和への旅立  
ち」のオープニングの大きな  
舞台をつくり、こぶし座は戦  
争がもたらした一つの悲劇を  
「遙かなるアリラン峠」とい  
う新作で参加してくれた。そ  
の感動は今でもお父さんの心  
を揺さぶっている。

君達に武器を持たせてはな  
らない。武器を持ち他国民を  
殺傷できる日本にはなら  
ない。今お父さんの心は震  
え続けている。  
そのためにも、お父さんは  
これからもこぶし座のように  
戦争を憎み、真摯に平和を謳  
える人たちと一緒に憲法第9  
条の本当の輝きを守り、これ  
が21世紀の世界史の中心に  
座るよう頑張ってくださいと  
思っている。君達が、このこ  
とを引き継いでくれるまで。

（弁護士・憲法第9条  
改定問題を考える集い  
事務局）

座は今年で創立四十年にな  
るが、創立時のメンバーも私  
一人となった。

四十年、月並みの言葉で  
あるが、長いよつでもあり短  
くもあつた、というのが実感  
だ。  
四十年の歩みはもろろん平  
坦ではなかった。  
若さにまかせて、ただが  
むしゃらに突き進んだ最初の  
十年間。

その反動で空中分解しそ  
うになり、なにもかも周りの  
皆さんのご支援に頼った十年  
間。  
その中からふたたび自力  
で歩み始めた十年間。  
北海道の歴史と道民の生  
活に深く根ざす作品の創造に  
向けて力を注いできた二十  
年間。

この四十年間の総括は後に  
譲るとして、長い間には自分  
の根性をシッと決める大事  
な時があるものだ。そのこと  
だけは書き留めたい。

### あなたら下手だけじゃ、わしらの腕はハンパないわ

一九六五年三月十日に旗揚  
げた私達の外での初仕事

### 新たな歩みのために

四十年を振り返って

國田修司

は、道路や公園の清掃など函  
館市の失業対策の仕事に働く  
人達への激励活動だった。

三月の末、ある現場の休憩  
所（ハコバンと呼ばれていた）  
を昼休みに訪ね責任者に話す  
と、休んでいたおじさん・お  
ばさん達が外に出てきてくれ  
た。訪ねてきたワケを話し、  
「ソーラン節」「花笠音頭」  
など五つ六つ踊り、終わって  
お礼の挨拶をした。本当はそ  
の時「カンパ」の訴えを私が  
することになっていたので

が、のど元まで出かかってい  
てもなんとこ言葉にならな  
い。こぶし座を始めるまで十  
四年間サラリーマンをしてい  
た私には、いくらこぶし座の  
財政は皆からのカンパでまか  
なっていくんだという方針で  
出発したところで、いざとな  
ると、口に出せないのだ。

言い出せないまま帰り支度  
を始めた時、一人のおばさん  
が、「あなたがた、カンパ集め  
るんでしょ。どれ花笠回しな  
さい」と言って財布を出し、  
お金を入れてくれたのだ。私  
はホッと緊張が解け、花笠を  
持って皆を回った。「チャー  
リン、チャーリン」と五円玉十  
玉の音がするたび、熱いもの

がこみ上げてきた。

ある日、例によってカンパ  
を頂いていた時、一人のおば  
さんが「あなたら下手だけじゃ、  
わしらの胸にはドンとくるも  
のがあるんだ」と言ってくれ  
た。

戦争で夫を亡くした人、病  
弱な夫を抱えて家族の生活を  
支える人、失対で働く女性達  
はみんなそんな困難を背負っ  
て生きていた。日当が一日一  
百五十四円のころから二コ  
ヨンと呼ばれていた失対労働  
者のおばさん達は、たくまし  
くそして温かい。誰が本当の  
敵なのか味方なのかを見分け  
る目は鋭い。

秋田の「わらび座」への道  
が閉ざされ、ならばと函館労  
音の活動を母体にした「こぶ  
し座」の創設に参加した私は  
理想に燃えてはいたが活動は  
未経験だった。生まれたばかり  
の座の歩むべき道もはつき  
りはしていなかった。

「あなたら下手だけじゃ、わし  
らの胸にはドンとくる。そ  
うだ、私達は働く人々の胸に  
ドンとくる作品を創り演じよ  
う。下手でいいわけではない  
が、なによりも人の胸を打つ  
感動こそが大事なんだ。カン  
パは応援の心だ。働く人々の  
応援こそ私達の宝なのだ。

私の腹は据わった。  
もつ二度と後戻りはしま  
い。働く人々がきつと支えて  
くれる。

私達は全日本自由労働組合  
（全日自労）のお世話で函館  
は勿論、道内各地の自労現場  
を回らせて貰った。

函館労音が座の生みの親な  
ら、自労は、北海道教職員組  
合（北教組）とともに育ての  
親だと、語り継いでいきたい。

### 北海道、見えていますか？

東京に住む支持者から毎月  
決まって絵手紙が届いたのは  
二十年くらい前のこと。ある  
一通に「つ書かれていた。  
「北海道、見えていますか？」  
ようやく自分の頭で考え自  
分の足でふたたび歩き始めた  
頃だった。

北海道の創造集団としての  
意味を改めて問い直し、まだ  
まだ不十分な姿勢を深く反省  
した。「本当に北海道に向  
き合ってきたのか？」  
パブルのはじけた北海道は  
無惨だった。

一九九一年、一年間休演し  
て全座をあげて創作に取り組  
んだ。それは北海道の現状を  
徹底的に学習することから始  
められた。いま思い出しても  
あの年ほど全員が創作に励ん  
だ年はなかった。私にとって  
も正念場だった。先頭に立つ  
た。

北海道に住む人達に心える  
作品をと全座が団結した。正  
確に言つと作品を創ること  
で団結を強めていった。

「音頭・夕張の女たち」「仮  
面劇・江差の繁次郎」貧乏神  
の巻、「海鳴り太鼓」などの  
作品ができた。「北海道に根ざ  
す」とは作品の創造なくし  
ては意味のない言葉だ。  
翌年、公演活動を再開した  
私達を道内各地の方々は熱く  
迎えてくれた。

私はそのエネルギーを歌舞  
劇「遙かなるアリラン峠」（一  
九九五年初演）、続いて第二作  
「南北の塔」（一 年初演）  
の創作に向けた。二つとも私  
の胸にすつと暖めてきたデー  
マだった。

歌舞劇というものに全員が  
それぞれの持ち場でありつた  
けの力を集中し、作品が求め  
たレベルに力を高めた。  
私達をそれに向かわせたの  
は、「北海道、見えていますか？」  
の一言である。

座右の銘として大事にして  
いきたい。

### 新たな歩み

私は創立時からのノート  
大事に持っている。その一冊  
一冊のどれにも決まって書か  
れているのは、どんな作品を  
創るべきか、どのような演目  
が求められているのかは当然  
のこととして、今月はどれだ  
け借入したらよいのかとか  
今年は何を返済できるか、と  
いった財政のやり繰りについ  
ても多い。集団を維持するた

めの財政的苦労は並大抵のこ  
とではなかった。正直言つて  
気弱になることもあつた。し  
かし、いつもその困難を乗り  
切ったのはやり続けようとい  
うという座員の団結であり、支  
援者からの「こぶしの灯を消  
すな！」という支えであつた。  
だから私の四十年の活動は、  
皆さんに続けさせて頂いたも  
のなんだと、心から思ってい  
る。

とりわけ七百人を超える  
「こぶし座後援会」の存在は  
重い。  
これからの座にとって相変  
わらず困難は大きいだろう。  
それを克服していくには、こ  
れらの方々への甘えではな  
く、私達が果たすべき「社会  
的使命」、民族の誇りを高ら  
かに謳い続ける民族芸能の継  
承と発展という事業を、皆さ  
んの知恵と力を借り、協力・  
共同して一緒に進めていこう  
とする努力が大切だと思う。

いま、座はNPO法人とな  
っているが、実は、NPOの  
精神とはこのことなのだ。  
昨年、私は理事長を退任し、  
横井が引き継いだ。いよいよ  
世代交代の時期を迎えた。  
今年六回目の年男となる私  
もそろそろ羽根を休める時が  
きたよつだ。  
引き継ぐ座員を心から信頼  
し、パトンを手渡そう。

ふるさとの鼓動  
北に生きる心  
むすんで

# こぶし

第117号 2005年1月1日発行  
発行責任者：横井正人 編集：機関紙委員会  
特定非営利活動法人 民族歌舞団こぶし座 北海道函館市陣川町 122-172  
TEL/FAX: 0 1 3 8 - 5 4 - 2 8 5 9 年4回発行  
E-mail: kobusiza@m19.alpha-net.ne.jp http://www.aa.alpha-net.ne.jp/kobusiza

### 主な内容

- (1) 新年のごあいさつ
- (2) 新春メッセージ
- (3) 40年を振り返って
- (4) 酉年に思う

## 年頭雑感

酉年に思う

座員・田畑悟志の  
相方  
田畑ゆかり

一九六九年生まれの年女です。前の酉年の頃はまだこぶし座の一観客に過ぎず、当時の私の認識は「獅子舞と、江差のしげじろつこのこぶし座」でした。

彼と出会い、一九九八年に結婚してから舞台をたくさん観せてもらい、座員の方々と触れ合い、家族としてこぶし座の応援をしているつもりで、実は、彼を含めたこぶし座のしなやかな強さや優しさに励まされている私です。

たとえば「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ」この言葉を聞いたとき、自分の中にある漠然とした想いがひとつの形を得たと思えました。看護という仕事に対する自分の姿勢や、大切な人を守ることに、自分を大事にすることに、それらの根本にある「想い」です。すべての生き物に感謝して、すべての人が人間らしい人間として生きることが忘れな

れば世界平和はすぐに来る...、そんな希望を抱いて、今年もよろしくお願ひします。

北海道を  
良くしたい  
中尾雄児

5回目の酉年、やりたいことが山ほど、柱は北海道を考へこぶし座を広めること。私はこぶし座で二十八年間、公演準備のために農村・漁村・山村を回っています。

特に最近、どこのマチでも仕事が減り高齢化や過疎化に悩み、財政難と合併問題で揺れ、北海道が沈没しそうな感じがします。

それに昨年は、道内の自衛隊も戦場のイラクへ派遣され、基地のマチでは反戦を言えないような空気が流れました。道東の矢野別演舞場では米海兵隊の八度目の実弾演習が進行され、平和が脅かされています。

そんな北海道の中で、力を合わせてマチづくりを」と頑張る人達がいいます。「戦争反対」と九条の会を立ち上げた人達もいます。どの人もみんな輝き、お会いするたびに明るい気持ちになります。

そんな人達と力を合わせ、私は、生活に根ざし心を通わせ元気の湧く伝統芸能を届けたいのです。

それが、北海道を良くし競争に反対する力になると信ずるからです。

## 地方歌舞団 交流会 開かれる

25回目を迎えた地方歌舞団交流会が、昨年の12月23日、25日、埼玉県美里町にある、荒馬座の第一の拠点、民族芸能センターで開かれました。今回は宮城・ほつねん座、東京・荒馬座、長野・田楽座、兵庫・花ごま、そして北海道こぶし座の五団体、総勢58名の参加となりました。

一日目は午後1時30分から美里町遺跡の森館ホールで大競演会。こぶし座は歌舞劇「南北の塔」をもって参加しました。公演日の二ヶ月前からチケットが完売となり迎えたい当日、各歌舞団の特徴ある演目の演奏と、はちきれんばかりのエネルギーに満席の会場は大盛況。舞台と観客がひとつとなり、心通い合つ公演になりました。

一日目は、『秩父事件120周年記念・映画「草の乱」の郷」



(全員集合！ 第25回地方歌舞団交流会)

君の夢かなえに出来ないか？  
**こぶし座員大募集**  
18歳以上の心身ともに健康な男女  
研修期間は1年間  
NPOは君を求めている！

千年の古都と呼ばれる平安の都、京都、しかしまた、古いものと新しいものが混在し、協調するこの都には、とても近代的な駅ビルが存在する。この建物の東西約470mは、全国一大きなものだ。毎年、年の初めのお目出度い催しとして、「この中央コンコースを使い、干支にちなむ伝統芸能が実施されているのだが、今年は、私たちが招聘を受けた。

この催しを主催しているのは、駅ビル内で営業をしている商店主の方々に、京都市も助成などをして実施されてきたものだ。...全国に、酉年にちなむ伝統芸能はいくつかあったが、ようやく、座のHPから「鳥舞」にたどり着き、これだと思ったとの依頼だった。

私たちが舞う「鳥舞」は、南茅部町の木直大正神楽の演目で、百年にわたって受け継がれ、しっかりと地元根付いている。

北海道の伝統芸能にこだわりの新たな節目を迎える私たちに、その年の初めての舞がこんな形で実現できることに、大きな夢をのせて羽ばたいてみたい。

(徹)

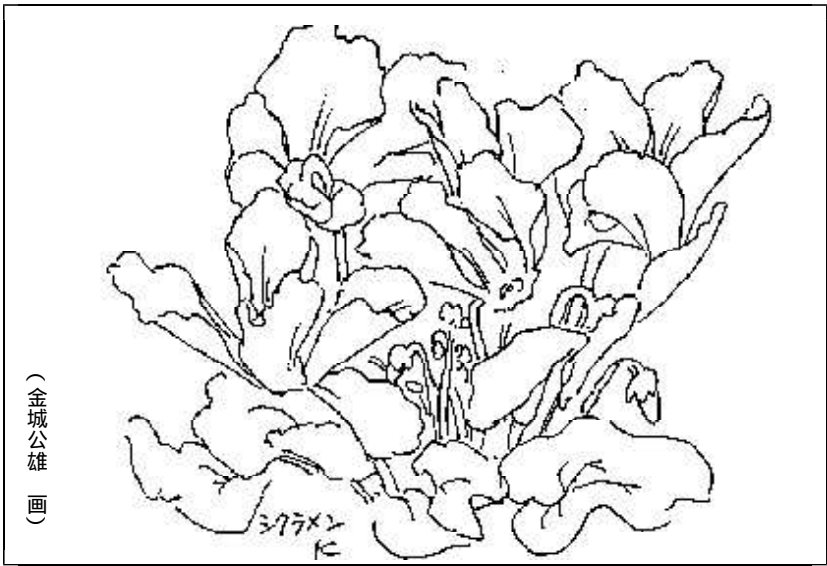
## 新年おめでとうござります

座創立四十周年を迎え

今年も確かな歩みを

二〇〇五年 元旦

特定非営利活動法人(NPO法人)  
民族歌舞団こぶし座社員一同



(金城公雄 画)

囑託

- 理事長 横井正人 (座員)
- 理事 中尾雄児 (座員)
- 理事 計良徹 (座員)
- 理事 計良正子 (座員)
- 監事 金城公雄 (座員)
- 國田修司 (座員)
- 古川喜美子 (座員)
- 横井ひとみ (座員)
- 松岡智恵美 (座員)
- 田畑悟志 (座員)
- 村田さつき (座員)
- 橋本かおり (職員)
- 岩島 司
- 梶原康男
- 西東英範
- 西東一葉
- 志賀松 晋
- 志賀松智恵美
- 三浦恒雄
- 三浦芙美子
- 下條真澄 (東京在住)

## 新年のごあいさつ

理事長 横井正人

皆さまにはお健やかに新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

昨年賜りましたご支援に対して心からお礼申し上げます。おかげさまでみんな元気で一年を過ごすことができました。ありがとうございます。

昨年は四月から新体制となり、前任者の国田から理事長を引き継いで新たな気持ちで進んでまいりました。日が経つにつれ責任の重さを実感してきましたが、公演や講座、そして取材などを通して多くの方からたくさんのご感動をいただき励まされました。

昨年を振り返りますと、学校公演では五十五ステージ約一万四千人の子ども達と出会い心をかわかせ、民族芸能の楽しさを伝えることができました。とりわけ、横浜での小学校公演は、一昨年に引き続き実現させていただき、たいへん嬉しく思っております。

秋の一般公演では合併でゆれる北海道の中で、なんとか地域のつながりを深めようとうがんばる人達に出会い、歌劇「南北の塔」での平和を願う声や、各演目に対する共感も多く、これまで活動してきたことにさらなる確信を得ることができました。

お忙しい中、公演を準備してくださった実行委員会の方々はじめご協力いただいた皆さまにあらためてお礼申し上げます。

さて、今年も創立四十周年です。作品の創造や経営、座員拡充など課題はいっぱいありますが、これまで歩んできた歴史を土台にみんなの知恵と力を出しあって飛躍の年にしたいと思います。

ところで、皆さんのお手元にこの機関紙が届く頃には私達公演部は京都にあります。今年の干支は「酉」ということで「鳥舞」の公演依頼があり、京都駅中央広場で元旦と二日に演奏することになりました。四十周年の年開けにこんな機会ができたことはなんと嬉しいことでしょうか！

今年もいつそのお力添えを賜りますようお願い申し上げます。新年のごあいさつといたします。

編集後記